

# 大腸がん検診と税の節約のはなし

坂本胃腸科医院

坂本 孝作 先生

大腸がん検診は、便中の血液成分の有無を検出し、陽性の人に第二段階の精密検査を行います。しかし、粘膜内に限局した早期の大腸がんの約3割は出血しないということに注意しなくてはなりません。「今年は引っ掛からなかったから絶対大丈夫」というのではなく、毎年検診を受けることが大切です。毎年受けていれば、早期大腸がんの発見ができたり、比較的早い時期の進行がんで診断されるチャンスがあります。大腸がんは増殖、進行が比較的遅いですから、毎年検診を受けていれば、遠隔転移をおこす前に発見される可能性が高いといえます。

また、治療方法の観点からも、早期がんであれば内視鏡的粘膜切除術だけですますこともできます。粘膜内限局のがんが陥凹型の場合や、粘膜下層に浸潤したり、筋層内へ浸潤してもがんの広がりが近傍の所属リンパ節内転移程度に限局していれば、切除術も腹腔鏡を用いた侵襲の少ない手術で済みますし、根治術も可能です。がんが進行し、腸管の全層にまで浸潤してしまうと、遠隔のリンパ節への転移の頻度や、隣接の他臓器浸潤、肝臓への血行性転移、腹膜播種の可能性が高くなり、根治は期待できません。姑息的に手術をし、高価な抗がん剤治療を受けても、5年生存できる可能性はほとんどありません。

このような形で人生の終末を迎える場合、お金では買えない大切な人生のすべてを失うことになるばかりでなく、実りの無い治療に費やされる経済的損失は、個人的にも市の財政にも大きいと言えます。よく、税金の無駄遣いが話題にされますが、知らずもがんになり、知らずに放置し、発見された時は治癒不能な状態であるということは、ある意味で税金の無駄遣いあると考えられます。治癒切除ができてこそ、税が生きてくるのです。市民一人ひとりが、市の税金を有効に、かつ節約できるよう、年に一度のがん検診を受けましょう。